

ついて」で紹介する。

最後に、司会を引き受けてくださった沼野恭子先生、討論者の大須賀史和先生、土岐康子先生をはじめとし、このような企画の機会を下さり、尽力して下さった皆様と、来場者の皆様に感謝を申し上げる。

仕事でロシア語をつかう

元自動車メーカー勤務 上智大学ロシア語学科卒 佐山豪太

この度、僭越ながら日本スラヴ人文学会で発表を行う機会を頂いた。ロシア、ウクライナ、カザフスタン市場を三年間担当してきた経験から、ロシア語による業務運営の利点や弊害を説明した。

「ロシア語で仕事をする」となると、大学を出たばかりの新社会人は気後れし、ロシア語ではなく慣れ親しんだ英語の方を選ぶ傾向が強い。確かに、4年間で得られる知識の蓄積だけではどうにもならない局面がいくつかある。その筆頭が専門用語であろう。自動車関連の技術用語はロシア語独特の形をしており、一つひとつ丁寧に、根気よく覚えていくしかない。

しかし、大学四年間の学習を通して、ロシア語文法と会話表現の基礎を身につけていれば、業務をロシア語で行うことはそれほど難しくはない。自分の経験則から言うと、新社会人に立ちはだかる問題は語彙力だけである。ビジネス文書や報告書には、日常生活では見かけない専門用語が散りばめられているが、大学で読んだ文章以上に難解な構造は出てこない。従って、業務に求められる用語を覚え、ある程度、業務の経験を積めば、ロシア語を実践に活かすことは可能だと考える。実際、ロシア語圏の国を相手にする場合、ロシア語を活かせる場面は多い（メール、電話、会議、出張など）。また、英語ではなくロシア語でコミュニケーションを図ることで、入手できる情報量は格段に増え、その正確さは英語とは比べものにならないほど上がる。

ロシア語に熱心だった学生が、英語一本で社会を渡り歩いていく風潮は悲しい。多くの学生が言葉を綾なすという、外国語学習本来の愉しみを忘れ、「仕事で必要だから」という理由だけで英語を学びなおす。もちろん、企業が英語を求めるといった側面もあるが、一方で、ロシア語の知識は業務の上で大きな強みになることを再確認してほしい。

インターネットを使用したロシア関係の人脈作りと仕事

東京外国語大学博士前期課程修了 杉浦正樹

このたび、日本スラヴ人文学会から発表の依頼をいただく光栄に恵まれた。当初は、日々の社会人としての会社勤務もあり、余り乗り気になれなかったが、学会メンバーのやる気に満ちた姿勢を見るにつれ、自分も依頼を受けた以上、発表者としての責務を全うせねばならないという気持ちが強くなった。

聴講者は主に学部生や大学院生とのことで、ロシア関係でロシア語を生かした仕事をした

いと望んでいる方も多いためと考え、なるべく自分の経験と社会人としての意見を交えた発表資料にした積りであった。資料は聴講者の皆様にご理解いただけるか不安であったが、結果からすれば杞憂だったようである。

当日の発表は、力が入ってしまい、また余計なアドリブも入れてしまったせいで、配分時間をややオーバーしてしまい、迷惑を掛けてしまった。しかし、発表内容は上記のとおり、概ね理解いただけ、また受けも悪くなかったようでありかなり安堵した。自分自身も力がやや入ったとはいえほぼ楽しんで発表することができ、発表後は充実感で一杯であった。

そもそも、学会というのは当然、学術研究の発表の場というのが一般的な考え方だが、このように、学術的というより、社会人にまで発表者を広げた、また学部生と彼らの就職までも意識した場というのが提供されたというのが小生にとっても新鮮で、且つ羨ましく感じた。小生が学部生時には全くなかった試みであり、またこれが無事成功で終わったのは本当にスラヴ人文学会の所属員の皆様の努力の賜物で、小職もそれに貢献できたことに再度感謝している。今後も縦の繋がりを意識した活動を行っていくと意義深く、現役の学部生や院生も喜んでくれるのではないかと考えている。

来年度以降も、社会人として微力かもしれないが手助けできることがあれば積極的に本学会に参加し、会を盛り上げていきたいと思う。

ロシア関連企業に就活してみよう

早稲田大学博士前期課程 江端沙織

当初は上記のタイトル通り、就職活動のみに限定して報告する予定だったが、パネルディスカッションという自由な議論の場をお借りできるということで、報告内容を大学院生・研究職の問題にまで拡大した。従って、本報告では今のロシア関係者全員が抱える問題を指摘し、会場から生の声を募ることにした。

報告の前半ではロシア関連企業にロシア語を武器として就職活動し、上手くいかなかった自らの体験談と、ロシア語学習歴を生かしつつも全く異なるやり方で同関連企業にアタックし、内定を複数獲得した知人の例を比較し、人との繋がりを最大限に生かした就活スタイルを探った。後半では、大学院生の視点から、院生生活のメリット・デメリットについて率直な意見を提示した。最後には、就活生と院生両者の問題を解決する方法として、インターネットの Facebook を利用し、ロシア語関係者からなるネットワーク構築の可能性について提案させて貰った。

現在、日本企業におけるロシアへのビジネスチャンスは徐々に開かれる段階にあり、ロシア語学習歴が実益に繋がる機会も着実に増えている。問題はそのチャンスを捕まえることができるかどうかである。恵まれない環境にあるため、本人の行動力や技術的な実力（語学力など）が無駄になる傾向は就活生の間でかなり日常的な現象である。

大学院生もまた慢性的な問題を抱えている。研究者を目指したその時から始まる、長い、場合によっては長すぎる社会との断絶である。それをむしろ歓迎する人も中にはいるかもしれない。だが私見では、大多数の若手研究者の苦しみはそこから発生しているように思われ